

男性保育士はいかにして「男性」保育士となるのか

—戦略から見える男性保育士の意識の諸相—

佐々木 奈々子*

How Men Working in Childcare Remain “Men”

—Diversity consciousness and strategies for success—

Nanako SASAKI

abstract

Previous research has found that male childcare workers face various difficulties because they are men working in a field that is widely considered a female occupation. In this study, I interviewed male childcare workers to examine how they are able to fulfill their duties under this difficult situation. It became clear that these childcare workers manage their duties by utilizing two strategies. The survival strategy was utilized by male workers to emphasize their masculinity, such as by employing dynamic ways of play to differentiate themselves from women. However, in contrast with the survival strategy, which was used to survive as a male childcare worker, they also utilized the pedagogical strategy, which focuses more on having feelings “for children” or “for better childcare.”

In conclusion, this research demonstrated that male childcare workers manage their duties through the effective use of two opposing strategies to cope with their identity as a man doing what is considered to be woman’s job.

Keywords: male childcare workers, pink-color job, strategy, masculinity

1. 問題と目的

近年、男女共同参画社会の推進が行われている中、女性が従事する仕事と捉えられてきた保育職に男性が参入してきている。これまで「女性職」とされていた保育職に、1977年から男性が参入できるようになり、1999年には児童福祉法施行令改正によって「保母」から「保育士」へと名称が変わり、「子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別による固定的な性別分業を植え付けることのないように配慮すること」という新たな項目が設けられた。また2003年に保育士資格が国家資格化され、このような変化の中で男性

キーワード：男性保育士、ピンクカラージョブ、戦略、男性性

*株式会社パソナ・お茶の水女子大学大学院博士前期課程2012年度修了

保育士の社会的認知も徐々に進んできている。世界的には EU（欧州連合）が行政主導で男性保育者問題に取り組んできた（木下，2000：113）。特に北欧諸国では両性の平等についての理念が尊重され、子どもの養育について社会全体が支援していくことについての合意が存在している。また、社会が女性の労働力化を前提とし、女性の出産、育児と仕事の両立を可能にするために、男性の家事育児の分担が政策的に後押しされているため、男性保育者モデルが受け入れやすい社会になっているといえる。このような社会的背景をもとに、北欧諸国では男性保育者の導入に対する合意はすでに成立しており、「いかにその数を増やすか」が課題となっている（Cameron, C. et al, 1999；埋橋，2001）。しかし、日本では男性保育者の社会的認知が進んでいるにもかかわらず、男性保育士の雇用人数は依然として少なく、男性保育士の割合を5-10%で留めている園が多いという実態がある（本多ら，2006）。また、男性保育士は雇用されても、継続する者は少ない。菊池が社会福祉施設調査報告を基に男性保育者の年齢構成を調査したところ、「1991年と2001年では29歳以下の若年層は増加しているものの、1991年に20代だった層で2001年も残っているのは6割（30代）に、30代だった層では5割（40代）に、40代だった層では2割（50代）に減少しており、保育職を継続している者が少ない」（菊池，2010：236）ことを明らかにした。

上記の男性保育士の課題において社会学の観点からの議論がある。矢原（2007）は、女性職種につく男性を「男性ピンクカラー」と呼び、看護職・介護職・保育職をピンクカラージョブとしている。その中で矢原は、女性職¹に参入する男性として主に看護職と介護職についての議論を行っており、男性ピンクカラーがケア労働に従事する男性固有の諸課題を有するというを明らかとした。ケア労働に従事する男性には、ケア労働固有の身体接触に関わるセクシュアリティの問題や母親や妻といった女性のジェンダー・イメージへと結びつく「感情労働」としての側面に関する問題、そして社会的及び経済的評価が低いということへの問題があるという。

さらに矢原は男性ピンクカラーには職場において少数派であることによって発生する困難が存在することを明らかにしている。この職場における男女の数的な配分に関する理論として、矢原は社会学者であるカンター（1977=1995）のものを用いている。矢原はカンターの理論を受けて、男性ピンクカラーは、ケア労働の領域における少数派であるがゆえ、男性ピンクカラー特有の困難を有していることを明らかとした。カンターの研究に基づいて中田（2002）もまた職場において少数派であるということとジェンダーの権力構造が、人間関係上の問題をどう規定しているかについて保育所園長及び男女保育士を対象としたインタビュー調査を行っている。そこでは人間関係上の問題が「男性」ということを際立たせ、男性保育者の職務を規定することが明らかとなっている。

数々の先行研究からも男性保育士は、「男性」保育士であるがゆえに、様々な困難を抱えていることが明らかとされてきた。ではこのような現状の中で、男性保育士はいかにしてその職務を継続していくのだろうか。このことを明らかにするために、本研究では、現在保育士として職務を遂行している男性保育士はどのような戦略を用いてその職務を全うしているのかについて検討を行っていくこととする。男性が保育職に参入していくことは、看護職や介護職に参入する男性ピンクカラーとは異なる戦略が見えてくるかもしれない。その戦略は何に起因するのだろうか。このような観点から調査を進めていく事は、今後の男性保育士の参入について考える一助となるであろうと考える。

2. 分析の理論的枠組み

上記の目的を明らかにするために、本研究では以下の分析枠組みを用い、研究を進めていく。先行研究でも見てきたように、保育職にはジェンダー規範が強固に規定されているという状況がある。男性保育士は、保育士として保育職に参入すると園長や女性保育士、さらには保護者からいわゆる「男性的要素」を期待される。このことに関連して、多賀は以下のように述べている。「自らが当該社会の正当な男性あるいは女性であろうとするならば、個人はそうした規範に沿った行動様式やライフスタイルを受け

入れざるを得ない。われわれは、生まれた瞬間から、周囲のこうした『男らしさ』『女らしさ』の期待にさらされて成長していく。正当とされる生き方を受け入れることができない者に対しては、なんらかの制裁が加えられ、ときには『逸脱者』としての否定的なレッテルを貼られる」（多賀，2001：89）ここから、周囲から「男性的要素」を求められることに対して、男性保育士が否定的態度を示すことは「逸脱者」として見られる可能性があるため困難となることが伺える。

このような状況にある男性保育士を対象に研究をする際に、男性保育士の戦略に注目することは意義があると考えられる。そこで本節では、男性保育士の取り得る戦略について明らかにしていく。男性保育士の取り得る戦略として、教育社会学における戦略概念が有効である。以下で、その詳細を述べていくこととする。

教育社会学における戦略とは、稲垣によると「教師の行為は、学校の構造的制約のなかで直面するさまざまな問題やジレンマに対して、教師がそれに対処すべく編み出した戦略として見えてくる。このように、教室での生徒との交渉のなかで、教師が『うまくやっていく』ためのおさまりのパターンを教師のストラテジーと呼ぶ」（稲垣，1992：99）、さらに「ストラテジー概念は、教師をあらかじめ役割の遂行者として見るのではなく、さまざまな制約に対処し、教師として生存し続けていこうとする存在として見る」（同上：99）ものであるという。また伊佐によると教師に関するストラテジー研究は、「1970年代以降、『新しい教育社会学』による解釈的アプローチへの注目とともに、それまで教育的なイデオロギーによってとかく正当化されがちだった教育行為の内実を実証的に解明しようと、数多くの知見を生み出してきた」（伊佐，2009：128）という。

教育社会学において議論されてきたストラテジーとして、Woods（1979）の「サバイバル・ストラテジー（survival strategy）」がある。Woodsは教育困難校でのエスノグラフィー調査を通して、教師の戦略について描き出している。そこでは教師にとって「彼らのサバイバルバリューはエデュケーショナルバリューよりも高い価値を持っている」（Woods，1979：146）とされているように、教師は「教師自身が生徒との葛藤や同僚の批判から逃れ」（稲垣，2000：100）、自身の生き残りを図る為、教育達成よりも教室の秩序を整えようとサバイバル・ストラテジーを用いるという。つまりサバイバル・ストラテジーとは「教師が教室のさまざまな状況に『対処』することを意味するだけでなく、そうした対処が教師の生き残りに関わって行われていることを含意」（稲垣，1992：101）する概念である。一方、サバイバル・ストラテジーに対して「理想の教育の実現」というペダゴジカルな視点で教師の行為を分析しているのが清水（1998）である。清水によると、教師と子どもの対面的相互行為の場である教室では、教師の行為が子どもたちの行為を規定してしまう場合がある。そこで「自らの行為に対する反応として生み出される子どもたちの行為が理想に近づくように自らの行為を規定している」という教師の戦略を清水はペダゴジカル・ストラテジーと呼んだ。保育所保育指針では、保育士は実際の保育において養護と教育が一体となって展開されることを求められており、ケアという側面だけでなく、教育つまり教師という視点を保育士は持っているということが分かる。このことから教育社会学における、教師という視点をういたサバイバル・ストラテジーとペダゴジカル・ストラテジーは、男性保育士の戦略として有効であると考えられる。

上記に述べたことから、男性保育士を対象に研究を行っていく本研究では、教育社会学におけるサバイバル・ストラテジーとペダゴジカル・ストラテジーを採用する。教師の戦略を参照しつつ男性ピンクカラーとして位置づけられる男性保育士の戦略分析を行うことで、ジェンダーと教育の関係を見ていくこととする。

3. 研究の方法

本研究では男性保育士自身の意識に着目するため、質的研究の中でも口頭データを得るべくインタビュー

一調査を行った。調査の具体的な手続きは、以下に示した。

(1) 調査対象

本研究での対象者は首都圏の保育所に勤める男性の保育士 29 名である。対象者はスノーボールサンプリング²によって抽出した。対象者の基本属性を表 2 に示す。なお、A から Z の対象者は個別インタビュー、AA から AF の対象者はグループインタビューにて調査を行った。対象者の平均年齢は 30.8 歳、平均保育歴は 8 年となった。また、各保育所における男性保育士の平均人数は 2.8 名、男性職員の平均人数は 4.3 名であった。また、男性保育士の担当クラスは、3 歳児と 2 歳児においてそれぞれ 25%と多く、0 歳児担当の男性保育士はいなかった。乳児 (0-2 歳児) 担当の合計は 31%であり、対して幼児 (3-5 歳児) 担当の合計は 53%であった。

表 1 インタビュー対象者一覧

氏名	年齢	保育歴	資格取得方法	役職	担当クラス	公私	男性保育士の数	男性職員総数	配偶者の有無	子どもの有無
A	20代	5-10年	4年制大学	主任	4,5歳	私立	2名	2名	なし	無
B	20代	1-5年	短期大学	なし	1歳	私立	2名	2名	なし	無
C	20代	5-10年	短期大学	なし	3歳	私立	2名	2名	なし	無
D	30代	10年以上	短期大学	なし	3歳	私立	1名	3名	あり	無
E	20代	1-5年	専門大学	なし	2歳	私立	1名	3名	なし	無
F	20代	1-5年	短期大学	なし	3歳	私立	2名	3名	なし	無
G	20代	5-10年	短期大学	主任	フリー	私立	2名	3名	あり	無
H	30代	5-10年	短期大学	なし	2歳	公立	5名	7名	なし	無
I	30代	10年以上	保育士試験	保育主査	3歳	公立	5名	7名	あり	無
J	20代	5-10年	専門学校	なし	2歳	公立	5名	7名	あり	無
K	30代	10年以上	専門学校	保育主査	フリー	公立	5名	7名	あり	有
L	20代	1-5年	4年制大学	パート	2歳	私立	2名	3名	なし	無
M	30代	10年以上	保育士試験	主任	3歳	私立	2名	3名	なし	無
N	30代	10年以上	保育士試験	主任	2歳	私立	2名	2名	なし	無
O	30代	10年以上	保育士試験	なし	3歳	私立	2名	2名	あり	無
P	30代	10年以上	短期大学	副主任	フリー	私立	4名	6名	あり	無
Q	20代	1-5年	4年制大学	なし	3歳	私立	4名	6名	なし	無
R	40代	5-10年	保育士試験	なし	5歳	私立	1名	5名	なし	無
S	20代	5-10年	取得中	パート	フリー	私立	1名	5名	あり	無
T	20代	1-5年	短期大学	なし	2歳	私立	3名	5名	なし	無
U	30代	10年以上	専門大学	なし	5歳	私立	1名	3名	あり	有
V	20代	1-5年	4年制大学	なし	3-5歳	私立	1名	2名	なし	無
W	30代	5-10年	保育士試験	なし	4歳	私立	4名	6名	なし	無
X	20代	5-10年	短期大学	なし	5歳	私立	4名	6名	あり	有
Y	30代	5-10年	専門学校	なし	5歳	私立	3名	5名	あり	有
Z	40代	10年以上	専門学校	主任	フリー	私立	3名	5名	あり	有
AA	30代	10年以上	短期大学	なし	2歳	私立	4名	5名	あり	無
AB	20代	5-10年	短期大学	なし	3歳	私立	4名	5名	あり	無
AC	20代	1-5年	専門学校	なし	4歳	私立	4名	5名	なし	無
AD	30代	1-5年	保育士試験	なし	3-5歳	私立	3名	4名	なし	無
AE	20代	1-5年	専門学校	なし	1歳	私立	3名	4名	なし	無
AF	20代	1-5年	専門学校	なし	2歳	私立	3名	4名	なし	無
平均	30.2歳	7年					2.8名	4.3名		

(2) 調査の時期と手続き

本調査は 2012 年 6-11 月に、首都圏の保育所に勤務する男性保育士を対象³に、個別インタビュー及びグループインタビューを 1 時間前後で行った。インタビューを開始するにあたって、対象者に指導教員の推薦状、そして研究の概要と個人情報の保護に関する情報を明記した承諾書を読んでもらい、インタビューの承諾を得た。インタビューの際は対象者に許可をとった上で IC レコーダーに録音し、後日文書化して整理した。

(3) 調査内容

本調査は初めに対象者の基本属性を聞き、その後インタビューの質問へと移る流れで行った。基本属性

については、年齢・勤務年数・保育士としてのキャリア・役職・保育資格取得方法・配偶者の有無について回答をしてもらった。

基本属性についての質問が終わり次第、インタビューへと移行した。インタビューガイドの調査内容は、「男性保育士自身の保育について(8項目)」、「男性保育士の労働・環境について(7項目)」、「男性保育士と女性保育士について(9項目)」、「保育観について(4項目)」、「保育士としての意欲について(4項目)」の5つのカテゴリーで構成されている。

これらの項目は主に、山本・山内(2007)の「男性保育者が今日置かれている状況」と斎藤・平田(2008)の「保育現場における男性保育士に対する意識調査」を参考に作成した。また、本調査者が2011年8-10月に行った保育所の園長へのインタビューおよび2011年10月に男性保育士2名を対象に行った予備調査から、男性保育士の保育所における比率に関する質問や男性保育士が増加することについての意識を問う質問、そして保育士という仕事への意識、意欲に関する質問を追加した。また、インタビュー対象者の回答や状況に合わせて、質問項目に新たな質問や説明を加えた。

(4) 分析方法

本研究の分析にあたっては、演繹的アプローチと帰納的アプローチの併用を行う。

演繹的アプローチを使用する際は、佐藤(2008)に倣い、まず抽象的・概念的な用語をラベルとして使用する「分析的コード」を中心にして文字データを整理していく。そのコーディング作業を進める中で、それらの概念的カテゴリーの具体例にあたる事柄を「記述的コード」として付記していった。また帰納的アプローチを使用する際は、インタビュー資料を読み込みながら、思いつくままにコードを書き込む「オープン・コーディング」を行い、そこから更に抽象度の高い概念的カテゴリーに対応するコードを割り振っていく「焦点的コーディング」を行った。具体的には、職場における生き残りを図ったものを「サバイバル・ストラテジー」とし、「園のため」や「子どものため」といった理想の保育の実現に関する語りを「ペダゴジカル・ストラテジー」とし、分析を行った。

4. 結果

男性保育士はどのような場面においてその戦略を使用するのだろうか。ここでは、先述した教師の戦略である「戦略1：サバイバル・ストラテジー」「戦略2：ペダゴジカル・ストラテジー」を分析コードとし、インタビューデータの分析を行った。

(1) 「戦略1：サバイバル・ストラテジー」

インタビューにおいて、男性保育士が子どもに対してその遊び方やダイナミックさを男性特有のものとし、その男性性を強調する場面が多く見られた。その例として下記の語りを紹介する。

求められるものっていうのはやっぱり男性にしかないものもあると思うし、絶対女性にしか出来ないものもあるのかな。まあ、お互いできるものもあると思うんですけど、そういうのはあるかなあと。
 〈男性にしか出来ないことって例えばどういったことですか?〉うーん。やっぱり関わりにしても、うん、なんか声出したりとか、まあ大きい人もいるとは思いますが、思うんですけど、なんだろうな。そう、ダイナミックさが、あの男性にはやっぱりあつたりすると思うし。発想もやっぱり、ちょっと違うんですね。〈どういう所で違いを感じますか?〉あの、…例えば女性だと、遊びに関してもおままごとをするにしても女性ならではの遊びっておままごととか切ったりとかっていうんですけど。男性とかだとやっぱり、それをさらにあの、…なんだろう。お団子作って、壁とかにこうバーンって

投げてみたりとか、あの、お友達がやっているのを取り上げちゃダメだけど、あの、走、り回って、あの、なんだろう、寝っ転がって子どもと一緒に真っ黒になるっていうことを女性はあまりしないけど、男性だとそういうのをしてみたりとか。（中略）やっぱり、あの声を掛けながらのこう掛け方とかもすごいダイナミックだし。 [H 保育士]

H 保育士はダイナミックさや発想の違いについて、女性保育士ならではの遊びとしておままごとをあげ、その内容を「切ったりとか」といったような静的な動作を挙げているのに対して、男性保育士の遊びは「走り回って、あの、なんだろう、寝っ転がって子どもと一緒に真っ黒になる」等、動的な遊びであるという。この遊びの違いを男性保育士独自のものとすると同時に求められていると H 保育士は感じている。さらに、男性保育士が行うことで「魅力的」になるものがあるということを示す E 保育士、Q 保育士は述べている。

ほらやっぱりさっき言ったように力仕事だったりとかさ、保育の中でもさあ、女の人には出来ないような、だからダイナミックな遊びとかは男にしか出来るわけじゃん？そういう部分での違いは確かにあるし。 [E 保育士]

上記のように、E 保育士は A 保育士と同じく男性保育士と女性保育士の違いとして、力の強さをあげている。ダイナミックな遊びを男性保育士特有の自然なものとし、子どもへの保育において女性保育士との差別化を図っている。

使命。それこそ女性じゃ出来ないこと、出来なくはないんですけど。物を作ったりとかそういうのってやっぱり男性がやるから魅力的なのかなって思ったり。そのサッカーもあんまり女性でこうガツガツやられる方っていないイメージなんですけど、ま、男性がやるからそれも魅力的に感じたりとか、するのかなって思ったりもするので。そういうところをもっと見せてあげられれば。 [Q 保育士]

Q 保育士は男性が行うことで魅力的になるものとして、物を作ることやサッカーをあげている。女性保育士ではなく男性保育士が、「ガツガツ」とサッカーをするところを子どもたちに見せてあげたいと Q 保育士は述べている。

このように男性保育士は女性保育士との違いとしてダイナミックな遊びや発想の違いによる遊び方の違い等をあげている。さらにこういった男性に特徴的とされる活動的な遊びは男性がやるからこそ魅力的に見えるという。このことはコンネルの「西洋諸国では、理想的な男らしさのイメージはスポーツ競技をつうじて最も体系的に構築され推奨される。」（コンネル，1987=1993：143）という言葉からも分かるように、男性保育士は子どもに対して、男性のイメージをダイナミックな遊びを通じて構築していると考えられる。

また、男性保育士が保育所にいる意義として、子どもがよい意味で「体をぶつけられる」存在であることという語りもある。コンネルによると、「身体的な意味での男らしさは日常社会行動の個人史のなかで、社会的ライフヒストリーのなかで成長してゆく」（コンネル，1987=1993：143）ものであり、日常保育の中で男性保育士自身が子どもに対して「身体的な男らしさ」を創り上げているのではないだろうか。これらのことから、男性保育士は子どもに対して積極的にその男性性を強調することで生き残りを図る戦略として「サバイバル・ストラテジー」を用いているといえるであろう。さらに T 保育士は男性保育士と女性保育士の子どもの接し方について下記のように述べている。

僕のイメージでは、やっぱりどうしても女の方は、型にはめようとしちゃう傾向があるかなっていう

イメージがありますね。こうしなきゃいけない、だとか、こうしなきゃいけないのがすごい。もしかしたらこの園だけかもしれないですけど、この園の女性だけかもしれない。別にそれを悪く言ってるわけじゃないです。良いところもちろんありますし。そういう部分で、感じるのはやっぱりもっと子どもらしく、俺だった、男性だったら、もっといいじゃん、子どもらしく、子どもだよ？って思うところなんですけど、違う。〈そういった違いは必要だと思いますか？〉もちろん必要だと思います。そういうメリハリっていうか、しっかりビシッと言う人がいて、そうやって僕たちみたいに、僕みたいに、バカみたいにはじ、はじけさせちゃうような。それが、わざとじゃなく、わざとなんですけど僕の場合は。 [T保育士]

T保育士によると、女性保育士は子どもに対して「型にはめようとしちゃう傾向がある」という。そのことに対して男性保育士は「もっといいじゃん」、「子どもだよ」と感じると述べている。女性保育士が子どもに対して「ビシッと言う」厳しい存在であることに対して、男性保育士は子どもを「はじけさせちゃう」存在であるとし、そういった違いは必要であるとT保育士は考えている。

男性保育士は「遊んでくれる人・ダイナミックな人としての男性保育士」と「楽しい存在としての男性保育士」という2つのカテゴリーでその男性性を強調しを行っている。このように男性保育士は女性保育士の保育との明らかな差別化を行うという、サバイバル・ストラテジーを用いていることが伺える。

また、上記のインタビュー並びに本研究のデータから、生き残りを図るために男性性を強調する、また男性であるということ自ら認識し、その男性性を活用する男性保育士が多くいることが明らかとなった。例えば、下記のC保育士は男性であることにより、特別視されることを認識し、男性性の強調を行っている。

やっぱりそれこそ、重宝される？例えば、物持ちとか。「はい、来てー」みたいな。とか、なんか、うん、そういう部分かな。なんか重宝される。例えば、好きだから。前に出るのが好きだから。子どもまとめるのとか好きだから、こうなんかやって。そういう時に「はい！（手招きの仕草）」みたいな。「はい！（手招きの仕草）」みたいな感じとかは、うん。あるかな。重宝されるっていうのが好き？やっぱり。ちょっと特別、特別視されたいのかな。ちょっと目立ちたがり屋だから。

[C保育士]

このように男性保育士は、周囲から「男性的要素」を求められ、男性であることにより重宝されている現実があるという。これは、矢原（2002）による男性ピンクカラーとしての戦略を男性保育士が使用していると考えられる。矢原（2002）は男性の看護職員は戦略として「戦略1：男性性を不可視化する」「戦略2：男性性を可視化する」をもつことを明らかにした。矢原（2007）によると、戦略1における男性性の不可視化とは、看護職について男性性を無効化し、見えなくする戦略のことを指す。対して、戦略2における男性性の可視化とは、男性性を強調するものであるという。男性保育士は矢原（2002）が男性の看護職員から見出した「戦略2：男性性を可視化する」を使用し、自身の生き残りを図っていると考えられる。

（2）「戦略2：ペダゴジカル・ストラテジー」

男性保育士は男性保育士の意義を上記のような「サバイバル・ストラテジー」を用いることによって自身の生き残りを図る一方で「子どものために」という思いによる「ペダゴジカル・ストラテジー」によって男性性の可視化を図っている。以下にその詳細を見ていくこととする。

俺の中では、やっぱり自分が運動好きだから保育に運動やたら取り入れるし、入れるからには…うん、それなりに出来てもらいたいし。ね、だから、でもリズム遊びとかピアノが全然出来ないから、その辺はちょっと申し訳ないなっていうのはすごくあるし。だから…男性っていうか、まあ自分、保育士として自分が出来ることは、自分が得意な面は全て伸ばしてあげたいなっていうのは…あるかなあ。

[A 保育士]

A 保育士は「男性だから」出来ることとして力の強さによるダイナミックな遊びを挙げている。A 保育士は自分の得意分野である運動を保育にたくさん取り入れていると言い、保育士として自分が出来ることは、子どもの能力として伸ばしてあげていきたいと述べている。

さらに、A 保育士は男性保育士と女性保育士の子どもへの接し方の違いについても、次のように語っている。

まあ、女性保育士のほうがすごく丁寧な気もするし、ま、言葉遣いひとつとってもすごく優しいし。個人の意見ね？〈はい。〉うーん。なんか一つ一つをすごく丁寧に？なんか、マニュアルに沿ってやってんのかなあ、みたいな。もう勝手なイメージね？これをしなきゃいけない、あ、これをするためにはこうしなきゃいけないっていうのをすごく丁寧にやってるな、っていうのはあるかなあ、女の人。でも、男の人は、ま、自分然り、他のね、数人しか見たことがないけど、ま、基本大雑把。楽しけりゃいいんじゃない？みたいなものがあるかな？〈違いっていうのは必要だと思いますか？〉うん、すげー必要、必要。〈子どもにとってですか？〉うん。だってさあ、細かいことネチネチネチネチ言われたら嫌じゃない？〈T:でもダイナミックさがありますよね。〉うん。なんか自分の好きなようにさせ、したいじゃん？大人ですらさ、細かい事こうしなさい、こうしなさいって言われたら嫌だと思うじゃん。子どもはもっと嫌だろうなっていうのもあるし。なら、好きなようにやれよ、みたいな。で、その中でちょっと、あ、気づいたことがあったら、でもここはこうしたほうがいいよ、とか、ちょっとずつその時々で伝えられればいいのか、っていうのはあるかなあ。

[A 保育士]

このように A 保育士は、女性を丁寧で優しい一方で「マニュアルに沿ってやってんのかあ」と感じているという。対して男性保育士は基本大雑把であり、「楽しけりゃいいんじゃない」という考えがあると述べている。さらに A 保育士はこの違いは子どもにとって必要であると述べ、女性保育士が「細かいことをネチネチ言われ」る中で、男性保育士が「好きなようにやれよ」と子どもへ自由を与えることは重要だと述べている。しかし、このような差別化は「子どもが嫌だろうな」と A 保育士が子どもの立場に立って考えた上での行動であり、ペダゴジカルな思いから男性保育士と女性保育士の差別化を行っていることも伺うことが出来る。次の G 保育士は、男性保育士は父親的役割を持っていると述べている。G 保育士は自身の考える父親的役割について以下のように語っている。

まあ、やっぱり、僕のイメージは子育ては家庭なので、まあ、お父さんのなじゃないですけど。なんだろう、まあ、安心して体動かせる、まあ背中に乗ったりパンチしたりとか、いい意味でですよ。いい意味で、そういうのが子どもたちが安心してできるのであれば、それはそれですごく。うん。女性だから叩かれないわけじゃないですけど。まあ、家庭から出た時のお父さんじゃないですけど。体をぶつけられる存在であるのであれば、男性保育士のまあ意義、うーん、にはなるのかなとは思いますがね。子どもがそう思ってくれれば。

[G 保育士]

G 保育士は、男性保育士に対して「お父さんの」な存在というイメージを持っているという。男性保育

士は「安心して体を動かせる、まあ背中に乗ったりパンチしたり」できる「体をぶつけられる」存在とし、これが男性保育士の意義であると述べている。また、男性保育士がそういった存在であることを子どもが認識することを望んでいる。

また、I保育士は男性保育士がいることによる変化について下記のように述べている。

あの、その、年齢の、年齢の子どもたちにもよるとは思いますけど、その、まあここでの保育士って母親、父親代わりであったり、する子どもたちでもあると思うので、父親的な役割っていうのを、あの、満たしていけるのであれば、例えばすごい、あの、半分くらいの人数が男性でもそれはそれでいいのかな、とも思いますけど。ただ勝手な、まあ持っているイメージだと、あんまり男がいると、なんか堅いとか、なんかなんだろうな、バカじゃないですけど、すごいなんか楽しくてワーってなってるような感じにはなるのかなって。はい。思いますね。(中略) 意義、意義ですか。なんか、なんだろうな。男性だからってという考え方っていうのになるかは分からないんですけど。でも、自分はその、行事であったりとか保育であったりでもそうなんですけど、やっぱり、もり、盛り上げていくっていうんですか？ うん、あの、今以上に楽しいことをしてあげたりとか、常に楽しんであげたりとかっていうのを、どんどんしていったらいいなあっていう風には思うんですね。 [J保育士]

J保育士は保育所に男性保育士がたくさんいると「楽しくてワーってなってるような感じになる」と想像している。また、男性保育士としての自分自身の意義を、盛り上げていくことや楽しいことを子どもに対してどんどんしていったらいいことにあると述べている。

またI保育士は、ダイナミックな遊びを男性保育士の特徴であるとするだけでなく、「男性であるから」子どもに求められているのだと述べている。

仕事しててですか。違い、違い。(先ほど役割が違うと仰っていましたが。) あ、あの、遊び方とかね。あの、やっぱりダイナミックに遊ぶのは男の先生のほうが面白いかな。ばんばんブン投げたりとか。まあ、力強い女の人もあるから、出来るとは思うんですけど。子ども達の求め方が違ってくるから。やっぱダーンって当たってくる子とかは、やっぱ男の先生にぶつかってくること多いし。そういう部分では男、男の先生だから出来る、まあこういうこと言うとジェンダーとかって言われちゃうんですけど。あんまり差はないけど、ま、そういう差別のない程度の差はあると思う。遊びの差とか。 [I保育士]

I保育士は子どもにとって、ダイナミックな遊びをする際の遊び相手は男性保育士のほうが面白く、また子どもがダーンとぶつかってくるのは男性保育士であるとしている。つまり、子どもの求めに応じた結果、男性保育士と女性保育士で違いが出てくるという。

このように男性保育士はダイナミックな遊びや身体をぶつけさせる存在であることを女性保育士との差別化という男性保育士が生き残るための戦略、つまりサバイバル・ストラテジーとしてだけではなく、「子どものため」と強調している男性保育士も多く存在しており、このようなペダゴジカルな視点を持つ男性保育士の存在に着目することには意義があると考えられる。

また、ここでもサバイバル・ストラテジーの際に述べた時と同様に男性保育士は男性性の強調、つまり男性性の可視化という戦略を使用している語りが多く見られた。

やっぱ、もっとそれ以外にも多分求められるものがこれからもっと出てくると思うから、そういうのを逆に使命感としてそこをやっていかなければいけない、力仕事もやっぱりそうだし、うん。なんか

みんながやることなんだけど、やっぱり男性。何で男性がいるのかっていう意図を考えるとやっぱりそういうこともやっぱり必要だし。あと今震災とかもあったりして、そういう時にやっぱり、みんなが動けるようにはしているけど、やっぱりそこでもいるのといないのじゃやっぱり全然違うと思う。その辺の意義。意義というか使命感は持った方が男性はいいかなあとは思う。 [H 保育士]

ここでも男性保育士は、サバイバル・ストラテジーのときと同様に、周囲から「男性的要素」を求められている現実があり、そして男性保育士もまた、「逆に使命感としてそこをやっていかなければいけない」と述べ、矢原（2002）による男性性の可視化戦略を行っている。ただ、使命感としてやらなければならない理由をH 保育士は「震災とかもあったり」という子どもや保育園の安全のためであると述べている。また、今回のインタビューでは防犯のためや女性の保育士がケガをしないように、といった語りも多く見られており（H 保育士、L 保育士、M 保育士、T 保育士）、子どものため、園のためというペダゴジカルな語りが見出された。

5. まとめと考察

男性保育士の語りにはその男性性の強調を「男にしかできない」や「女性とは違う」という言葉で表すことで男性保育士と女性保育士の違いを明確にするものがあつた。先行研究によると、男性保育士は周囲の「男性」としての期待にさらされているという。そのため、男性保育士は「周囲の期待により『女性と異なる保育』探しゲームをさせられる」（中田，2002：201）。男性保育士が「『女性と異なる保育』探しゲーム」をした結果、男性保育士は女性保育士との違いを明確化する戦略を持ったと考えられる。こうした戦略は、教育社会学における「教師自身が生徒との葛藤や同僚の批判から逃れ、教室や学校のなかで教師自身を防衛し、生き残る」（稲垣，1992：100）ための「サバイバル・ストラテジー（survival strategy）」という生き残り戦略といえるであろう。しかしその一方で、男性保育士の中にはダイナミックな遊びや力仕事を積極的に行い、その男性性を可視化をすることに関して「子どものために」や「園のために」という思いを持ち、そのために男性保育士が男性として子どものために出来ることをするという「理想の教育の実現」を目指す「ペダゴジカル・ストラテジー」を用いる男性保育士が多くいたことも事実である。このことから子どものために伝統的な男らしさを振る舞い、理想の保育の実現を目指している男性保育士の存在を捉える事ができた。

このように、男性保育士は自身の保育職での生き残りのために、男性性を強調するというサバイバル・ストラテジーを用いる。しかし、他方では自分自身の生き残りのためではなく、子どものためにその男性性を保育に取り入れたり、園のために男性の特性を活かしその職務を遂行している。男性保育士は、保育職という従来女性職であった職業で男性性の可視化という「サバイバル・ストラテジー」と、より良い保育のためにという思いからの男性性の可視化を行う「ペダゴジカル・ストラテジー」を併用することで「なんとかやっていく」のではないだろうか。3 歳児神話や母性神話、そして性別役割分業観によって、男性に育児や保育は向かないとされてきた保育分野において男性保育士が自身の居場所を確保するために男性性の可視化を行うことと、新たに「子どものために」に今までになかった新たな保育を男性保育士が担うという思いからの男性性の強調を行うことは男性保育士が保育職において「なんとかやっていく」という戦術であるといえるであろう。本研究での男性保育士の保育職参入の動機を見ていると、単純に子どもが好きという思いや子どもとの関わりにおいて子どもに対する興味や面白さを見出し、保育士となった男性保育士は多かった。このような「子どものために」という思いを持つことによって、男性保育士は「なんとかやっていく」ことが可能となっているということを知ることが出来る。

本研究では自身の保育所での生き残りを図るために男性性の可視化を行う男性保育士や、「子どものために」「園のために」とより良い保育を目指すためという思いから男性性の可視化を行う男性保育士がい

ることを明らかにした。しかし、生き残りを図るための男性性の可視化戦略や「理想の教育の実現」のために無理に男性性の可視化を行うといった戦略を男性保育士が取り続けることは男性保育士にとって有益だろうか。男性保育士の普及のためには、周囲が男性保育士に対して伝統的な男性性にもとづく性別役割分業を期待するのではなく、男性性における多様性を理解し、男性保育士が戦略を取ることをない環境作り、つまり性別役割分業を求めることのない職場環境を作ることが求められる。そのためには保育施設(所)長や女性保育士、また子どもの保護者といった周囲の男性保育士に対する理解とともに、今後の保育における両性のありかたの問い直しが要となると考えることが出来るであろう。

¹従来は女性職種(pink-collar job)であったものに男性が参入していくことを「男女混合職種化」と呼ぶ(首藤, 2000)。

²スノーボールサンプリング(雪だるま式標本抽出) : 「標本対象者の報告したネットワーク情報(つまり人脈情報)を用いることで、標本となる人々を積み上げること」であり、「一般に非確率的方法であるが、抽出枠の補充に密接に関連した方法を説明するものである。」(グローヴスら, 2004=2011: 95)

³男性保育士の雇用数は首都圏において増加している、という事がよく言われており、首都圏内に限定して調査を行うことによる偏りが危惧される。東京都の公立保育園における男性保育士雇用の内訳を見てみると、男性保育士雇用数の平均は最大が港区の7.3%であり、最小が江戸川区の0.49%であり、大きく開きがあることが分かった。このことから首都圏内においても男性保育士雇用に関しては地域ごと、更には施設ごとに多大な差があることが分かる。首都圏内に限定をして調査することによる偏りはほぼないものとして調査を進めていく。

【引用文献】

Cameron,C.,Moss,P. and Owen,C.,1999,*Men in the Nursery: Gender and Caring Work*, London: Paul Chapman Publishing Ltd.

Connel,R.,2008,*GENDER(1st Edition)*,Cambridge: Polity Press Ltd. (=2008, 多賀太訳『ジェンダー学の最前線』世界思想社.)

Connel,W,R.,1987,*Gender and Power,Society*,Oxford: Basil Blackwell Ltd. (=1993, 森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詩訳『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会学——』三交社.)

Groves,R.,Fower,F.,Couper,M.,Lepkowski,J.,Singer,E.,and Tourangeau,R.,2004,*Survey Methodology*,Canada: John Wiley & Sons,Inc. (=2011, 大隅昇監修『調査法ハンドブック』朝倉書店.)

本多潤子・小林育子・櫻井登世子・安村清美・鈴木力・成田眞・高嶋景子・中原篤徳, 2006, 「保育現場において認識されている男性保育者の特徴」『田園調布学園大学紀要』1:153-176.

稲垣恭子, 1992, 「クラスルームと教師」柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』有斐閣ブックス, 91-107.

伊佐夏実, 2009, 「教師ストラテジーとしての感情労働」『教育社会学研究』84: 125-144.

Kanter,R,M.,1977,*Men and Women of the Corporation*, New York: Basic Books. (=1995, 高井葉子訳『企業のなかの男と女』生産性出版.)

菊地政隆, 2010, 「男性保育者を取り巻く近年の保育現場の動向と課題」『淑徳大学大学院研究紀要』17: 235-244.

中田奈月, 2002, 「『男性保育者』の創出——男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響——」『保育学研究』40(2): 196-204.

齋藤正典・平田健朗, 2008, 「保育現場における男性保育者に対する意識調査——男性・女性保育者から見た男性保育者——」『盛岡大学紀要』25: 67-77.

- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析方法 原理・方法・実践』 新曜社.
- 清水睦美, 1998, 「教室における教師の『振る舞い方』の諸相——教師の教育実践のエスノグラフィー——」
『教育社会学研究』 63: 137-156.
- 首藤若菜, 2000, 「女性職種に参入する男性労働者——看護師の事例を中心に——」住沢博紀・堀越
栄子編『21世紀の仕事と暮らし——社会制御と共生契約の視角——』第一書林, 158-174.
- 多賀太, 2001, 『男性のジェンダー形成——〈男らしさ〉の揺らぎのなかで——』東洋館出版社.
- 埋橋玲子, 2001, 「男性保育者導入のジェンダー効果——EUでの取り組みをとおして——」『家族関係
学』 20: 107-118.
- Woods,P.,1979,*The Divided School*, London,Boston and Henley: Routage&KeganPaul.
- 矢原隆行, 2002, 「男性看護職をめぐる課題と戦略——その隘路と可能性について——」『看護学雑誌』
66(11): 1006-1011.
- 矢原隆行, 2007, 「男性ピンクカラーの社会学——ケア労働の男性化の諸相——」『社会学評論』58(3): 343-355.
- 山本理仁・山内淳子, 2007, 「男性保育者が今日置かれている状況」『山梨短期大学紀要』 27: 80-94.